

ノルウェーにおける1814年の独立とその意義

- ノルウェー・ナショナル・アイデンティティの形成 -

1814's Independence and the Effect in Norway: Creating Norway National Identity.

文学研究科社会学専攻博士後期課程在学

大 崎 伸 城

Nobushiro Osaki

．はじめに

1．研究の視点

現在の世界情勢のなかでノルウェーにおけるナショナル・アイデンティティ¹⁾は、新たな局面に立たされている。現在、欧州において拡大しその影響力がさらに強くなりつつあるEUであるが、他の北欧諸国が加盟していくなかノルウェーはその連合に加盟していない。ノルウェー国内においても議論は平行線をたどっている。歴史的に2度の連合を経験しているノルウェーは今後どのような回答を出すのであろうか。もし、ノルウェーがEUに参加するのであれば、その中でノルウェーはどのようなアイデンティティを持ちうるのであろうか。この論文においてはこれらの問いを考える上でのなんらかの手がかりになるであろう歴史的出来事について論じる。

ノルウェーにおけるナショナル・アイデンティティには歴史的に3つのポイントがあげることができる。1814年、1905年、1940-44年である。これらの年はそれぞれノルウェーが他国からの支配から自国の独立を勝ち得た年である。

この3つのポイントの最初の1814年は、ノルウェーが近代国家としての枠組みを自らつくり上げ、デンマークとの同君連合から独立した年である。ナポレオン戦争の結果により、約400年間のデンマーク・ノルウェー同君連合が、デンマークからスウェーデンへのノルウェーの割譲という形で解体される。この割譲はキール条約によって定められたのであるが、その条約に反し、当時ノルウェーに総督として着任していたクリスチャン・フレドリックを中心に、独立運動が組織された。彼はノルウェーの主に上流階級の人々と共に憲法制定会議を召集し、憲法をつくり上げた。そして議会を設置し、ノルウェー王の承認、ノルウェーの独立を宣言するのである。この独立はノルウェー以外の諸国からの承認は得ることができなかったが、この一連の出来事はノルウェーのナショナル・アイデンティティを呼び覚ます結果となった。この独立から半年後、ノルウェーは軍事的圧力からスウェーデンと同

君連合を組むこととなる。この連合は90年に及ぶこととなる。

次の1905年は、このスウェーデンとの同君連合からの独立の年である。その当時、独立に先立ち国民投票が行われておりその結果が非常に興味深い。この国民投票は、85.4%の投票率において、368,208対184という結果を出した²。これは全体票の99.95%の数字を出している。これは当時投票権を持っていた一部の知識層だけによる数字の現れであるが、他に女性独自による非公式の署名が244,765の署名³が集まっていることを考えるならば、この当時、相当の国民意識が形成されていたと見てよいであろう。これは先の1814年以降に登場したナショナリストたちの貢献によるとみてよい。彼らは特に1840年代から始まる民族ロマン主義の影響を受けた者たちであり、彼らはノルウェーの人々に意識の変化をもたらした。この意識改革は言語、民話、文芸、芸術、教育を通しての改革であった。また、この時代の初期のナショナリストたちの多くが1814年に少年期、青年期であったことも見逃してはならない。

そして最後の1940年は、ナチスドイツによるノルウェー侵略である。1940年、ノルウェーは、ナチスドイツからの侵略を受ける。それに対しノルウェーは、英国に亡命した国王と政府を中心としたレジスタンス運動を繰り広げる。1944年、ノルウェーはドイツから解放される。

このようにノルウェーは3度の独立運動を繰り広げたわけであるが、1905年における国民投票の結果をもたらした要因、ナチスによる傀儡政権下において国民がレジスタンス運動を支持した要因として、本論文ではその源流を特に1814年に見るのである。

2．先行研究と文献資料について

日本における北欧研究の中で近代に関する研究はいくつかある。しかし、そのほとんどがデンマーク、スウェーデン、そしてフィンランドに関する研究である。ノルウェーに関する歴史研究はヴァイキング時代に集中している。

北欧に関する通史的な歴史書として代表的なものに百瀬宏『北欧史』山川出版1980年、そして百瀬宏・熊野聡・村井誠人『北欧現代史』山川出版1998年がある。また学術論文を掲載する定期刊行物は早稲田大学パルト・スカンディナヴィア研究会の発行する『北欧史研究』1982 - があげられる。この『北欧史研究』には1814 - 1905年のスウェーデンとの連合時代のノルウェーに関する論文がいくつか存在する。村井誠人「ノルウェーの政治的スカンディナヴィア主義の概観」(1982)と本間春樹の「同君連合後期のノルウェー・スウェーデン関係」(1990)である。これら二つの論文は連合の全般、後期に限定するものであり、連合の開始時における論究は見ることができない。また、各大学の紀要論文を当たったが、やはりノルウェーの歴史研究に関してはヴァイキング時代の研究が主であり、近代に関するものは極めて少ない。

ノルウェーにおけるこの1814年における一連の出来事の詳細は、日本にはまだ紹介されていない。この理由を考察してみるに、中世から近代に至る間ノルウェーという国家が存在しておらず、デンマ

ーク・ノルウェー連合、スウェーデン・ノルウェー連合という形でノルウェーは常に連合内の一地方として扱われ、結果、ノルウェー研究はデンマーク、スウェーデン研究の副次的研究として扱われてきたものと考えられる。しかし、それはあくまでデンマーク、スウェーデンの側の視点からの研究である。このような理由から筆者はノルウェーの視点からの研究の必要性を感じた。今回、本論文でこれを研究対象とすることには日本における北欧研究の進展に幾分かの意味があると自負するものである。

次に、本論文で参考にした主な文献を掲げることとする。本論文の研究意図からすれば、日本国内における先行研究の限界に鑑み、海外の出版文献を資料として活用したからである。以下は日本国内で参照可能な文献である。

北欧の通史に関して日本においては、Karen Larsen, *A History of Norway*, N.J., Princeton U.P., 1948. (カーレン・ラルセン『ノルウェーの歴史』)やT. K. Derry, *A History of the Kingdom of Scandinavia*, London, 1979. (T.K. デリー『スカンディナヴィア王国の歴史』)が定評がある。後者のT. K. Derryは、*A history of modern Norway 1814-1972*, Oxford, Oxford U.P., 1973. (『近代ノルウェーの歴史1814 - 1972年』)を書いており、非常に参考となった。カーレン・ラルセンとT. K. デリーは、ともにノルウェー近代の出発点を1814年として捉えている。

また、John Midgaard, *A brief history of a Norway*, Oslo, 1989 (ヨハン・ミッドゴード『要約ノルウェーの歴史』)は比較的簡易な歴史書ではあるが、読みやすく参考文献として使われることがある。Ivar Libæk, Øivind Stenersen, *Norges Historie*, 2.reviderte utgave, Grøndahl og Dreyers Forlag AS, Oslo 1997. (イヴァン・リバク、アイヴィン・ステネルセン『ノルウェーの歴史』第2版)は、ノルウェーにおける外国人用のノルウェー語テキストであるが、著者は、*A History of Norway: From the Ice Age to the Age of Petroleum*, Oslo, 1995. (『ノルウェーの歴史、氷河時代から石油時代まで』)と同じくしており信頼性がある。また、資料、図ともに豊富で資料が絶対的に少ない日本においては資料的価値が高い。

定期刊行物としては、*Scandinavian Journal of History*, Stockholm, 1976- (スカンディナヴィアジャーナル・オブ・ヒストリー)がある。特に1995年の20号は、ノルウェーにおけるナショナリズム、ナショナル・アイデンティティの特集(主に中世を中心)が組まれている。この号の中で、Anne-Lise Seip (アンネリーセ・サイプ)の "*Nation-building within the union: Politics, class and culture in the Norwegian nation-state in the nineteenth century.*", *Scandinavian Journal of History* 20, 1995. (「連合内でのネイションビルディング；19世紀のノルウェー国民国家における政治、階級、文化」)は、アントニー・D・スミスの ナショナル・アイデンティティの定義からノルウェーを分析している。

また同じく、20号においてSivert Langholm (シーヴェルト・ラングホルム)が "*The new nationalism and the new universities: The case of Norway in the early nineteenth century.*" (「新たなナショナリズムと新たな大学：19世紀初期におけるノルウェーの事例」)を書いているが、これ

はノルウェーにおいて大学がどのようにナショナリズムに関係していたかを論述しており、非常に興味深い。

スウェーデン・ノルウェー連合に関する研究としては、H. Arnold Barton, *Sweden and Visions of Norway: Politics and Culture, 1814-1905*, (H・アーノルド・パートン『スウェーデンとノルウェーの展望：政治と文化、1814 - 1905年』)がSouthern Illinois Univ. Prから 2002年に出版されている。アーノルド・パートンは、スウェーデン系アメリカ人でありながら、当時の連合内におけるノルウェーの視点から書かれており、ノルウェーの政治面、文化面におけるスウェーデンへの影響を分析している。

また他にLindgren, Raymond E. (レイモンド・E・リンドグレン)による*Norway-Sweden: union, disunion, and Scandinavian integration*, A Publication of the Center for Research on World Political Institutions, Princeton University, Princeton, N.J., Princeton University Press, 1959. (『ノルウェー・スウェーデン：連合、分離、スカンディナヴィア統合』)がある。

Falnes, Oscar Julius, *National romanticism in Norway: Studies in history, economics, and public law*, New York, AMS Press, 1968. (オスカー・ジュリアス・ファルネス『ノルウェーのナショナルロマン主義：歴史、経済、公法の研究』)は、19世紀スウェーデンとの連合時代のノルウェーにおけるロマン主義について詳しく書かれている。

Drake, Michael (マイケル・ドレイク)の*Population and society in Norway, 1735-1865, Cambridge studies in economic history*, London, Cambridge U. P., 1969. (『ノルウェーの人口と社会』)は主に人口統計による社会学的分析であるが、本論文では、1735年 1865年当時のノルウェー、スウェーデン、デンマークに関する人口統計の資料として使用した。

Gunnar Jahn, Alf Eriksen, Preben Munthe, *Norges Bank, Gjennom 150 År*, Oslo, 1966. (グンナー・ヨハン、アルフ・エリクセン、プレーベン・ムンテ『ノルウェー銀行、150年間』)は、1814年以前の銀行創設の要求から戦後50年代までのノルウェーの銀行の歴史に関する記述である。

Johan T. Ruud, Arnold Eskeland, Gunnar Randes, Magne Skodvin, *Dette er Norge 1814-1964*, Gyldendal Norsk Forlag, Oslo, 1963. (ヨハン・T・ルード、アーノルド・エスケランド、グンナー・ランデス、マグネ・スコーヴィン、『ノルウェー 1814年 1964年』)は、ノルウェー語の重厚な装丁の三巻本であるが、これは近代ノルウェーの150年に渡る歴史を様々な分野から記述している。

最後に、アイツヴォル1814年 - 王国政治センターネットサイト "*Eidsvoll 1814 - Rikspolitisk senters nettsted*" <http://eidsvoll1814.museum.no/index.html> についてだが、これはノルウェーにあるアイツヴォル記念館のウェブサイトである。ここには憲法制定会議に関する情報が多く掲載されている。ここでは会議に参加した者の名簿やクラウス・パヴェル、クリスチャン・フレドリックといった人物の1814年当時の日記を参照することができた。

. 1814年以前

1. デンマーク・ノルウェー連合下の国民意識

1814年以前、連合下におけるノルウェー人にとって、国民意識はどのようなものであったのであろうか。

まず、当時のノルウェーに住む人々に国民意識があったのかどうかであるが、『Scandinavian journal of history』の20号（1995年）にアンネリーセ・サイプが「連合内でのネーションビルディング；19世紀のノルウェー国民国家における政治、階級、文化」"Nation-building Within the Union: Politics, Class and Culture in the Norwegian Nation-State in the Nineteenth Century"という論文を出している。アンネリーセ・サイプ（Anne-Lise Seip）は、この中で18世紀の啓蒙君主の時代に“Vaterland”（祖国）というドイツの観念がデンマーク・ノルウェー連合に持ち込まれ“Fæderland”（祖国）という言葉に翻訳されたと述べている⁴。また、1787年に出されたハンス・アーレンツ（Hans Arenz）の著作より啓蒙的愛国心の5つの定義を引用している。

- (1) 王への忠誠
- (2) 家族への愛
- (3) デンマーク人に対する善い振る舞い
- (4) 両方の国に対する福祉の奨励
- (5) この啓蒙的愛国心のすべて（出生地が固有で自然な対象を常に残していたとしても）

この5つの定義を通し彼女は以下のように分析している。定義の(4)「両方の国に対する福祉の奨励」から、デンマークとノルウェーは二つの分かれた王国からなると考えられていたとし、続けて、(3)「デンマーク人に対する福祉（良い生活状態）の奨励」からは、ノルウェー人に対してのデンマーク人という意味での“デンマークの民族・det danske Folk”という、二つに分けられた人々がそこに存在していたとみる。そして、(5)「この啓蒙的愛国心のすべて（出生地が固有で自然な対象を常に残していたとしても）」のポイントからは、“Vaterland”として出生地ノルウェーを定義していると分析している。

この彼女の分析からわかるように、デンマーク・ノルウェー連合下においてデンマーク人とノルウェー人は、それぞれ自分たちの出生地（出生国）に帰属意識を持っていたのである。さらに彼女は、「ここでの重要な点は、デンマーク人とノルウェー人が分離していることではない。理性と価値観によって形つくられた道徳的な義務を下に両国を統一するという努力である⁵」と述べているように、連合はそれ自身を維持するため意識的に国家の側からの統一を行っていたのである。しかし、それはデンマーク・ノルウェーを一つの王国へと統合する努力ではなく、一人の王の下での二つの王国の連合と

いう形、すなわち同君連合の維持を目的としていた。

また、歴史家カーレン・ラルセン (Karen Larsen) は、ノルウェーはデンマークに征服されていたのではないとさえ述べている。カーレン・ラルセンによると、連合は力によって維持されていたものではなく、同一の支配者の下、姉妹国家として統治されていたと述べている⁶。しかもそれは矛盾した概念としてノルウェー人に認識されていたのではなかった。カーレン・ラルセンは、ノルウェー人は自身の出生国を強い独立性を持つものとみなし、連合それ自身よりも連合内における公平さと彼らの権利が侵害されることに対して憤りを持ったと書き記している⁷。ノルウェー人は連合下にありながら自身の独立性を潜在させており、この自分たちの国に対する帰属意識は連合に相対する意識ではなく(支配する側の意図的な努力によってではあるが)少なくともノルウェー人にとっては同等の立場として捉えられていた。そしてこの連合は、1380年から1814年までの約400年間の間、存続していたのである。

アンネリーセ・サイプは、「ノルウェー人の中におけるナショナル・アイデンティティの感情をより強くする、他の理念もまた見つけることができる。⁸」と述べ、歴史家ゲルハルド・ショーニング (Gerhard Schöningh · 1722-1780) を紹介している。当時ゲルハルド・ショーニングは、ノルウェー人は南から後にやって来た特別な種族であるという理論を打ち出していた。この理論は後に否定されることになるが、この理論自身は、学術的な手法によって作成された後の研究者に影響を与えた。ショーニングはまた、ノルウェー人の特徴を自然や気候によって影響され培われたものであると主張した。ノルウェー人は、単純で、辛抱強く、甘やかされていなく、権威に対して率直にものをいい、自由を愛し、王に対する忠誠を持つというイメージを作り上げたのである。これは民族的プライドを強めることとなったと彼女は分析する。

また、これとは他にノルウェーの民族意識の現われとして1814年の40年ほど前から新たな動きが見え始める。1774年にコペンハーゲンにおいてノルウェー協会・Det norske Selskab (The Norwegian Society) が学生によって組織されていた。これは文学に限定されたものであり一種の社交クラブのようなものであり、この中からはヨハン・ヘルマン・ヴァッセル (Johan Hermann Wessel) やヨハン・ノルダール・ブルーン (Johan Nordahl Brun) といった文学者を出した。彼らは英国やフランスの古典的なスタイルにノルウェーを賛美する愛国的な詩を残している。このクラブはクリスチャニアに大学ができるとその役目を終え、1812年に解散した。また、ノルウェー本土においては、科学的歴史的研究とノルウェー語の方言研究に対する興味が一般的に大きくなってきていた⁹。カーレン・ラルセンは、これら文学と知的な生活が自由主義と民主主義の理念とともに1814年の出来事へと現れ出たとみている¹⁰。

以上のように1814年以前における同君連合下において、ノルウェーに生まれた人々はノルウェー人としての意識は存在していたようである。しかし、連合下の政治の側面においては、ノルウェーは未だデンマーク絶対君主制における政治体制に依存しており、議会・政府もデンマーク側にのみ存在し

ていた。しかし、アンネリーセ・サイブはノルウェーのナショナル・アイデンティティにおける政治の側面は準備段階（熟成段階）であったととらえる。それを大学建設、銀行創設の要望にみるのである。

2. 銀行・大学の要望

ノルウェー側からの銀行・大学そして通商省の要望は1814年以前より度々、存在していたのであるが、1814年の10年前ころより具体的な動きとなっている。

銀行に関する要望は、18世紀の海上貿易の増大による商人の影響力の拡大が要因となっている。特に1807年以前の10年間は「ノルウェーの黄金時代」と呼ばれるほど経済は発展していった¹¹。自信をつけていった商人たちは独自の銀行の創設を望んだのである。通商省の要望は当時、銀行の創設と同じく、商人層から持ち出されていた。これは関税に関する自由を求めたものである。この当時の商人階級は官僚と密接に関係しており階級間の結婚もたびたび行われ、商人が官僚へと階級移動するなることもめずらしくはなく、ノルウェーにおけるこの階級間の境界は低かったといえる¹²。このように経済力、政治力ともに力を持ち始めた商人であったが、この要望は連合の統一に対するデンマーク側の懸念から承諾されることはなかった。

大学の要望に関しては、主に官僚、聖職者、商人から出された。これまで高等教育を受けることを望むノルウェー人（主に聖職者、官僚になろうと思う者たち）は、デンマークのコペンハーゲンにある大学¹³、もしくは、他の国に行かなければならなかった。（ちなみに、当時の多くの商人たちは主要な貿易相手国である英国に自分たちの子供たちを留学させていたようである。ここで学んだ者たちは自由主義の思想を身につけていった。）その渡航費、生活費の多額の出費の理由から大学創設の要求は銀行創設の要求とともに長く言及され続けていたようである。

では、これらの要望に関してはノルウェーの大部分を占める農民層にとってどのように捉えられていたのであろうか。ミッドゴード（Midgaard）によれば、この大学建設の要望は農民も完全には無関心ではなかったという。まれにではあるが農民出身者が聖職を望むこともあったからである¹⁴。しかし、農民から聖職者へと目指す者の割合は極めて少なかったと考えるのが妥当であろう。シーヴェルト（Sivert）は、当時クリスチャニアで牧師をしていたクラウス・パヴェルス（Claus Pavels）の日記から「これは新たな大学建設を望む人々の叫びの声ではなく、ほんのわずかの個人の声である。」との記述を引用し、「（パヴェルスは）大学の創設に対する一般人の熱狂的な支持の欠落を発見していた」と説明している¹⁵。一般の人々の意識は、大学よりもより実生活に関連のある経済の方に関心があったということであろう。この当時、（若干年代がずれるが）1815年における農民層の割合は83%¹⁶であったことを考えれば、大学、銀行、通商省創設の要望は、一部上層の者たちの要望であったのである。

この大学創設の運動は、ナショナル・アイデンティティを形成しようとする一つの現れであると見ることができるが、これはいまだエリートの側からの形成であったのである。

この大学建設の要望も、先の銀行の理由と同じく連合解体の懸念から却下された。当時の王、デンマーク・ノルウェー王がノルウェーに大学を設置することにより絶対王政が揺らぐと考えたからである。しかし、ノルウェー側からしてみれば、自分たちの文化的、経済的機構の設立のみを求めているのであり、連合と政治システムから離れることは望んでいなかったという¹⁷。

これら大学、銀行の要望はデンマーク側による拒否が続いていたが、1808年ころより現実味を帯び始める。ナポレオン戦争による海上封鎖の影響を受け、1808年にデンマークはノルウェーに政府委託委員会を創設したのである。これにより、ノルウェーは独自の大学、銀行を創設することが容易となった。そして、1809年に経済と教育の発展の為にノルウェー福祉協会（The Society for Norway's Welfare・Selskapet for Norge Vel）が組織される。この組織にはノルウェーが独自の政府機関を持つことを望む人々と、極少数であるがデンマークとの完全分離を望んでいる人々がいた¹⁸。このノルウェー福祉協会は詩人の父といわれるニコライ・ヴェルゲランド（Nicolai Wergeland）牧師のエッセイを用い全国から支持と資金を集めた。このニコライ・ヴェルゲランドはデンマーク・ノルウェー連合を“fæderland祖国”と考えていた。その為、ノルウェーのみを“祖国”と考えていたオーステッド（Ørsted）によって非難されている¹⁹。また、ヴェーデル（Wedel）という人物が、「この大学建設に関する問題は王の業務内ではなく王権の承認に関係なく人々はこの計画を進めるであろう」と断言した。その後、デンマーク王フレデリックは1811年、ノルウェーが大学を持つことを譲歩し“王立フレデリック大学”の名称の下、当時のノルウェーの首都クリスチャニアに設置されることとなった²⁰。

この大学は1813年の1月に、哲学の教授であるニールス・トレショウ（Niels Treschow）を中心に、5人の教授、1人の講師が任命され、8月、学部として神学、医学、法学、哲学が設置され18人の生徒から開始される²¹。

シーヴェルトは、さらにこの最初の6人の教授・講師に注目している。この6人のうち3人が憲法制定会議のメンバーに選ばれており、また、ニールス・トレショウが1814年の議会のメンバーとなり、後にも政府に参加していることに注目している。また、この最初の6人のうちの1人、ゲオルグ・スヴェルドロップ（Georg Sverdrup）²²について多く言及している。シーヴェルト本人も大げさであると述べながらも、G.スヴェルドロップを民族的指導者として有名であるとし、民族神話としての英雄と捉えている。G.スヴェルドロップは、また憲法制定会議において、クリスチャン・フレデリック²³が望んでいた憲法への彼の王権の維持をあきらめさせ、人民主権の原則を受け入れさせることに影響を及ぼしたと述べている。カーレン・ラルセンの『ノルウェーの歴史』には、フレデリックを説得する様子が描かれている²⁴。1814年5月17日、憲法が制定されフレデリックがノルウェー王に承認される会議においてスヴェルドロップは議長を務めている。この5月17日はノルウェー憲法記念日として、ノルウェーにおける最大の記念日となっている。

シーヴェルトは、このG.スヴェルドロップと彼の同僚の努力に対する働きを、民族機関としての大学による反応と捉えることに対しては、十分な根拠があるものとはではないと退けている²⁵。

．憲法制定会議

1．憲法制定会議への準備期間

以上がノルウェー独立に大きな影響をあたえた銀行の要望、大学の創設であるが、以下より具体的に独立の経緯を述べたい。

1807年以前、ノルウェーは主に英国との貿易により経済的に好況であったが、この年以降ノルウェーは経済的に不況に陥っている。これは1807年にデンマーク・ノルウェー連合がナポレオン側に立ったことによる。ナポレオン側が英国の経済を破綻させるため大陸封鎖を行うと、ノルウェーは逆に英国によって沿岸を封鎖されてしまったのである。この封鎖によりデンマークとの連絡は絶たれ、1808年、デンマークはノルウェーのクリスチアニアに政府委託委員会を設ける。これは約3年間続き、1810年に廃止されるまで、ノルウェーは自国の管理を自分たちで行うことができたのである。ノルウェーは当時、自国の食料供給をデンマークからの輸入に頼っており、これに付け加え1808年から1812年は「黒い年」といわれる飢饉が続き、ノルウェー国内は窮乏状態が続いていた。ここで注目すべき人物がいる。それは政府委託委員会の一員であったヴェーデル・ヤールスバルグ伯爵（Count Wedel Jarlsberg）である。彼はスウェーデンとの連合を望む東ノルウェーの経済人のなかにおいて力を保持しており、また困窮するノルウェーに食料を確保するという業績を得ていた。彼は英国で教育を受けていたこともあり自由主義に傾向しており、デンマークの絶対主義を非難している。スウェーデンとの連合を望んでいた理由の一つとして、スウェーデンが比較的に自由体制であったことがあげられる。彼は後に憲法制定会議の中でスウェーデンとの連合を目指す連合派の指導者となっている。

1810年、一時期英国による封鎖は緩められたが、1812年に再度封鎖は行われた。デンマーク王フレドリックはノルウェーとの連合を守るため、自分の甥であるクリスチャン・フレドリックを政府委託委員会の廃止後の総督（statholder）としてノルウェーに派遣する。

以上のようにノルウェーは当時、若干であるがデンマークからの直接的な行政管理から離れ、自ら行政を行える立場となっていたのである。

一方、スウェーデンは1809年にロシアによりフィンランドを失っていた。リンドグレン（Lindgren）が述べるには、スウェーデンはその埋め合わせとして、ノルウェー征服という帝国主義的理念を復活させたという²⁶。またスウェーデンはジャン・バプティスト・ベルナドッテをスウェーデン王子として迎えている。彼はかつてのナポレオンの将校である。彼は後にスウェーデンの伝統的な名前であるカール・ヨハンを名乗る（以下カール・ヨハンと記述する）。1812年と1813年にスウェーデンはロシア、英国とナポレオンに対抗するため軍事同盟を結んでいる。1812年4月5日、スウェーデンは、フィンランドを失った代償としてノルウェーを手に入れる為、秘密条約をサンクトペテルブルグにおいて結んでいた²⁷。この条約の後、カール・ヨハンはスウェーデン軍をデンマークへ向け進軍させた²⁸。

この進撃によりデンマークはキールで降伏し、1814年1月14日、キール条約²⁹が締結される。1月25日、スウェーデン政府は公式に書面においてノルウェーを獲得した³⁰。これにより1380年からの長い連合が終わりを告げたのである。スウェーデンはこの段階では、新しい連合を1810年王位継承法に基づき、1つの議会、1人の王、1つの政府そして、スウェーデン人による閣僚と王を想定していた³¹。

1月24日デンマーク王フレドリックはノルウェー総督であるクリスチャン・フレドリックにノルウェーをスウェーデンに明け渡し、デンマークへ戻るよう公式に要請した。しかしながらクリスチャン・フレドリックはノルウェーを去らず留まりノルウェーを独立させるべく運動を開始する。その理由としてカーレン・ラルセンは、彼自身のノルウェー人に対する想いからノルウェーの王となる決意をしたと記述している³²。キール条約により決定された連合であるが、実際の連合の開始に若干の猶予があった。その要因として、1814年の最初の6ヶ月の間、カール・ヨハンが欧州の政治に巻き込まれたことがあげられる。その合間をつき、クリスチャン・フレドリックはノルウェーの独立への準備を行うのである。リンドグレンの言葉を借りれば、「この6ヶ月の間にクリスチャン・フレドリックは新たな国家、新たな君主制、新たな体制、新たな政府を作り上げた。³³」のであった。

クリスチャン・フレドリックはノルウェーの国民の様子を知るという名目で、オスロからトロンハイムへの巡行を行っているが、リンドグレンはこの巡行を軍事指導者との相談と、ノルウェーの人々にスウェーデンの脅威に気付かせるためであると述べている。さらに彼はこの巡行でのスピーチはノルウェー人にナショナリズムを呼び起こさせ、また、彼の人気を増大させ、そして彼に期待を持たせることとなったと分析している³⁴。カーレン・ラルセンはこの巡行を、時間稼ぎと人々の行動を奮起させるためであったとし、その様子を「あらゆる場所で彼とスウェーデンへのレジスタンスに対する訴えは熱意を持って歓迎された³⁵」と述べている。

フレドリックには幾人かの助言者がおり、そのなかでも最も重要であったのがカーシュテン・アンカー（Carsten Anker³⁶）である。彼は憲法の宣言を具体化する計画書をつくりあげた。また憲法制定会議が召集され議論が進むなか、彼は単身英国に渡り、ノルウェー独立の他国の承認のために英国政府に説得を試みている。

また、デンマーク王フレドリック6世もこの甥の行動に関して無関心ではなかった。というのもクリスチャン・フレドリックはデンマークの王位継承権を保持しており、もしノルウェーの独立がなされ彼がノルウェーの王となれば、その後彼がデンマークの王として王位を継承しノルウェーを再びデンマークの元に戻すことが可能となるのである。

クリスチャン・フレドリックは、2月16日アイツヴォルに20人の名士たちを召集し会議を開いている。ここでは名士たちとフレドリックとの間に意見の相違があった。フレドリックは絶対君主制を望み、名士たちは憲法に根ざした民主制を目指した。名士たちは自分たちの後ろに人民がいると信じており、フレドリックがそれに対抗するなか、彼らはその考えを強く主張していったという³⁷。

カーレン・ラルセンは「彼らは絶対君主制の主権の理論は自分たちの国の将来の上に立つには堅

実ではないと信じていた。³⁸」と述べ、さらに絶対君主制はノルウェーの歴史にはそぐわないとしている。その理由としてカーレン・ラルセンはかつてのティング(Thing³⁹)の精神を持ち出している。ヴァイキング時代のノルウェーにおいて、王はティングに集まった人々の承諾が得られなければ認められなかったことをあげ、絶対主義の時代においても、その理念は死に絶えていなかった、と述べるのである⁴⁰。それゆえに、ノルウェーにおいては、ルソーとフランス革命の理念がそれほど抵抗感もなく取り入れられ、人民主権という進歩的な主義を推し進めていくことができたのであると論じている⁴¹。

絶対君主制を望むフレドリックであったが、ゲオルグ・スヴェルドロップの説得により彼は納得することとなった。その説得の様子はカーレン・ラルセンが描いている⁴²。

以上のような経緯のもと憲法制定会議への準備が進められ、2月25日に、憲法制定会議に参加する議員の選挙が行われた後、4月10日に憲法制定会議は招集されたのである。

2．憲法制定会議

それではこの憲法制定会議におけるメンバーの内訳はいかなるものであったのであろうか。そのメンバーの振り分けを以下の様にまとめた。

憲法制定会議の内訳⁴³

農民	(Bønder)	36名
経済人	(Næringsdrivende)	18名
政府役人	(Embedsmenn i offentlig administrasjon)	26名
軍人	(Militære)	17名
聖職者	(Geistlige)	15名
		計112名

上記のように憲法制定会議には全体が112人に対しその約3分の1にあたる36人が農民層で占めている。しかし実際に招集された代表は上流階級が大部分であったといっていよい。当時、選挙権は制限され労働者や小さな農家には与えられていなかったのである。農民層のなかで参加できたのは一部の富裕な農場主に限られていた。その農場主でさえ、実際の会議での発言ではただの一回のみの発言に終わっている⁴⁴。しかし、民主主義的なその手続きに関する意義は失われないであろう。ノルウェー全国の55の地域から平均的に各地域1～4人が選出され会議に参加をしている⁴⁵。これはかつてのヴァイキング時代でのストールティングと呼ばれる全体集会の手続きを思わせる。アーノルド・バートンはこの憲法制定会議自体をストールティングと呼んでいる⁴⁶。

この会議の中で軍人を含む政府官僚は審議の中で最も行動的な部分となったという、彼らは高等教

育と国家事情に良く精通していたのである⁴⁷。

この制定会議は進行の上で独立派と連合派の二つに分かれ論議がなされている。

独立派はノルウェーの完全な独立を望む者たちであり、会議のなかで多数をしめた。彼らは役人と農民によって構成され、そのリーダーは、ファールセン（Chr. M. Falsen）であり、オスロ地方の地方裁判官であった。

それに対し、連合派はスウェーデンとの連合を望むものたちで少数派であり、30名ほどであった。彼らは、スウェーデンとの連合を望んでいたが、スウェーデンとの連合関係は完全な平等性を持つということが前提として考えられていた。彼らは現状ではこれらのメンバーは、ノルウェーの独立がスウェーデンや他の国々（キール条約の署名国）によって承認されることはほとんど不可能であると考えたのであった。連合派のリーダーは先に紹介したヴェーデル・ヤールスベルグ伯爵（Count Wedel Jarlsberg⁴⁸）であった。経済人たちはほとんどこのグループに参加した。彼らはまた経済復興を目指すため英国との平和を望んでいた。

しかし、注目すべきことは、この独立派、連合派はともにノルウェーを独立した政治共同体とみなし、それを維持することを前提に会議を進めていったことである。

会議の主要な目的は憲法の作成であり、会議のなかでの決定に関して全会一致を基本姿勢としていた。議長はファールセン（Falsen）であり、彼は委員会の業務と同様に会議のなかの審議でも指導的手腕を発揮したとされ、彼は後に“憲法の父”と呼ばれている。

憲法は5月17日に会議で承認され、同じ日クリスチャン・フレドリックは全会一致で王に選ばれた。ノルウェーはこの日、独立し、自由憲法をもった王国として再創設されたのである。

この新しく作られた憲法についてアーノルド・バートンは、「アメリカ国家と連邦制憲法、1791年のフランス憲法、1812年のスペインの憲法、そして1809年のスウェーデン憲法から影響を受け、ヨーロッパにおいて最もリベラルな憲法であるといつてよい。」とコメントをしている⁴⁹。

この憲法はアイツヴォル憲法と呼ばれ、ノルウェーを君主制の下、憲法と一院制の議会を持つ立憲君主制と定めた。この議会はかつてノルウェーに存在した集会と同じ名前であるストールティングと名づけられた。また国王の権限としての拒否権は制限され、貴族制度を廃止とした。このアイツヴォル憲法は改定を繰り返しながらも現在のノルウェーの憲法として存続している。

このようにしてノルウェーは形式上、独立を宣言したが、実際はこの独立はスウェーデンや他の国々の承認を得たものではなかった。

それでは、ノルウェーが独自の国のみで独立できると判断した法的根拠は何であろうか。アーノルド・バートンはこのように解説している。ノルウェーは、デンマーク王フレドリック4世が1665年のレジア法（Lex Regia）に記載されている王権の制限の法規定に違反していると捉えたのである。これは、君主は王朝支配に変えることはできず、もしくは王国のいかなる地域も割譲してはならないとの文面から解釈された。つまり、この文の後半で規定されているように1814年のキール条約でのデン

マークからスウェーデンへのノルウェーの割譲はデンマーク王国の法律上許されるものではなかったのである。それゆえに、ノルウェーは政府体制を自身で決定する自由を有する、また国家の支配者を自身で選出することができる一つの自然国家となることができると判断したのである⁵⁰。

クリスチャン・フレドリックと上流階級のエリートたちは、このようにノルウェーという国民国家をつくり上げていったが、一つ大きな問題を残すこととなる。憲法を作り、議会を作り、政治機構を整えていった一方、外交政策に関する機関である外務省、大使館を設置しなかったのである。これはクリスチャン・フレドリックが外交政策に関しては自らの手で全てを決定しようと考えていたからであるが、これが後に、スウェーデンとの連合下において、ノルウェー独自の外務省、大使館の設置が長い間スウェーデンとの間で論争となるのである。

5月28日にカール・ヨハンがストックホルムに戻るとスウェーデンは今までの非積極的な姿勢を覆し、ノルウェーに対し強硬な態度を見せ始めるのである。しかしここではまず、1814年当時のノルウェー人の意識をみてみたい。

3．1814年前後におけるノルウェーの人々の意識

1814年、ノルウェーはキール条約締結の1月14日より、デンマークからの支配を脱し、同年5月14日の憲法制定から、独立を果たした。しかしそれはナポレオン戦争による余波の結果であり、ノルウェーに住む一般の人々にとって、それは予期せぬものであったのである。多くの人々は、「古きよき友人」であるデンマークから離れることに少なからずの不安を抱いていたようである⁵¹。アンネリーセ・サイプ (Anne-Lise Seip) は当時クリスチانياに住んでいたノルウェー人聖職者クラウス・パヴェル (Claus Pavels) の日記を二つ引用している。

「私は過ぎ去った幸福な日々を思い出した、そして私の心の中には「永遠の分離はありえない」との慰めの考えが生じた。」と。

これは彼が1813年の12月31日にデンマーク人の友を想い書いた日記である⁵²。この1年後の1814年の同日(当時、ノルウェーは既にスウェーデンとの連合下に入っている)クラウスはこのように書き記している。

「365日、これが1年と呼ばれているものだが、1年というよりも1世紀と記憶されるべき年が過ぎ去った。決戦もなく、暴力や血の革命もなかった、私はこのようなネーションは他に考えることができない」⁵³。

アンネリーセ・サイプはこの引用に対してコメントしていないが、この二つの日記を比べると独立以前と独立後の意識の違いが見えてくる。前者の日記にはデンマークとの連合を懐かしむ姿があらわれている。これに対し、後者の日記からはスウェーデンとの連合下にも関わらず、自分たちのネーションに対して誇りをもつ姿があらわれている。

クラウス・パヴェル (Claus Pavels) は聖職者という極少数の階級の代表である。彼らの高等教育

はデンマークのコペンハーゲンで受けられており、デンマークへの帰属意識、親密感があるのは当然かもしれない。それでは当時の一般の人々の意識はどうであったのか。

キール条約直後、当時ノルウェーの総督であったフレドリックは一度ノルウェーをさるうとし、ノルウェーに最後の別れの言葉を書面にのせた。デンマーク王室からの忠誠から離れ、新たな政府に速やかに屈することを促したのである。そしてノルウェーが現在の享受している、居住、法、権利、自由、財産を残すこと約束し、これが、ノルウェーを戦争と飢餓から救う唯一の方法であることを強調した。その言葉に対し当時のノルウェーの人々が受けた印象をカーレン・ラルセンは、ヤコブ・オール (Jacob Aall)⁵⁴の記録の引用から記述している。そこにはフレドリックがデンマークと分離しスウェーデンとの連合を宣言したことに対し、ノルウェーの人々が衝撃を受けた様子が描かれており、「ノルウェーがデンマークから分離することに対して受けた多くのノルウェーの人々の思いは、怒りよりもある種の嘆きであった。⁵⁵」と解説している。そして連合からの分離に対する反応は引き続きヤコブ・オールの言葉を使い「古い親愛なる友達を失った」ように見えたと言っている⁵⁶。

また、カーレン・ラルセンは、ゲオルグ・スヴェルドロップが憲法制定会議において、フレドリック王子へ絶対君主制をあきらめさせることに尽力しようと決意させるきっかけとなったある農夫との会話を記述している。それはこのようなものであった。

あまりにもたくさんの人々が王子の下に会いに来ることを心配した農夫がスヴェルドロップへ、ノルウェーをスウェーデンへ手渡すことに投票するだけはやめるように忠告した。彼はこの人生においてスウェーデンの属国となったノルウェーを目にするような日々が訪れないようにとねがう。そして、彼は付け加えて「あなたが発言し、行動を起こす時、神があなたのそばについていることを覚えておいてください」と述べるのである⁵⁷。この出来事がスヴェルドロップにとって深い印象を与えたとしている。

1814年の当時、人々は不安と困惑の中にいたのである。友人であるデンマークからの強制的な離脱、そしてその後にはせまっているのは長年戦争を続けてきた強国スウェーデンである。人々はここにノルウェーを独立させようとするエリートたちの動きに敏感になり始めていたのである。

・ 1814年以後

1 . スウェーデン・ノルウェー連合体制

1814年の5月17日、憲法が制定され、ノルウェー王となったフレドリックはすぐに大きな問題の前に立たされている。キール条約によるスウェーデンからの圧力の下、スウェーデンとの戦争からの回避、そしてノルウェーの自由をどう守るかという問題である。

英国、ロシア、オーストリア、プロシアが連合を推し進めるため委員会を組織し、スウェーデン王カール・ヨハンとともにノルウェーとの交渉を5月、7月と臨んだが最終的に戦争という結果で終わ

る⁵⁸。この戦争は2週間で終了し、経験と装備に勝るスウェーデンが勝利を収めた。その後、クリスチャン・フレドリックとノルウェー閣僚、そしてカール・ヨハンとの間で調停が行われ、1814年8月14日モス協定においてフレドリック王はノルウェー王位から退官し、ノルウェーはスウェーデンとの連合体制を受け入れることとなった。ノルウェーの独立はわずか3ヶ月間で幕を閉じたのである。

しかしながら、この条約についてミッドゴードは後のノルウェーにとって非常に有利な点が2つあったと述べている。一つはアイツヴォル憲法が残されたことであり、二つ目として連合がキール条約によってではなく、ノルウェーの人々の意思によってなされるということに基礎が置かれたことである⁵⁹。

10月10日に臨時ストールティングにおいてスウェーデンとの連合が承認されるのを見届け、フレドリックはデンマークへと帰国した。そして10月20日、ストールティングにおいて連合とカール・ヨハンをノルウェー王とすべく議論が行われたが、5人の反対があったのみであった⁶⁰。

12月4日、ストールティングにおいて憲法の見直しとカール13世のノルウェー王への選出が承諾された。この12月4日にスウェーデンとノルウェーとの連合がはじまったのである⁶¹。この12月4日は後に1824年に憲法制定の日である5月16日を祝う学生を中心とした人々と、12月4日を記念日とするスウェーデン王と政府役人との対立を生み出すこととなる⁶²。

以上が、憲法が制定された後のノルウェーのスウェーデンとの連合へと移り変わる経緯の大枠である。

それでは連合下における国家としてのノルウェーの立場はどのようなものであったのであろうか。

1814年のノルウェーとスウェーデンの人口はノルウェーが約90万人であるのに対し、スウェーデンは約230万人であった。また、スウェーデンにおいて、土地所有者は貴族であったが、ノルウェーにおいては極少数の者のみが広大な財産を所有していたという。スウェーデンの貴族制を考えたとき、ノルウェーのほうがより民主的であったといえる。ノルウェーの官僚支配は所有する土地は少なく、低所得者からの政治的な敵意もなかったという。これは後の世紀の参政権体制の発展に優位となった⁶³。また、ノルウェーの農民は(bønder⁶⁴)は経済的にも公的にも自由であり、ノルウェーには農奴は存在していなかったと記述されることが多い。

スウェーデン・ノルウェー連合は連合法によって規定されていたが、ノルウェーはスウェーデンと連合をした後も憲法と議会を残されることとなった。ノルウェーは連合下においても自治権を持っていたのである。また、ノルウェーの通貨は独自のものを使用し、それぞれの金融機関はそれぞれの政府と議会によって管理された⁶⁵。

それでは連合のなかの王の立場はどのようなものであったのだろうか。王は法によって定められ、総督(statholder)としてノルウェーを統治していたのである。この王の権力は大きく、議会の開会、立法の承諾、そして拒否権を持ち、ノルウェーの閣僚は王により任命された(しかしその閣僚の任命はストールティングのリーダーのアドバイスに従ったものであった。)⁶⁶。そして王は外交の権利とノ

ルウェー領域内海域内における軍事（防衛）の命令権を所有していた⁶⁷。

王の権力は少なからずものであったが、王は法によって定められ、そしてノルウェーは議会を所有するなど、ノルウェーはこの新たな連合下において、その政治的側面における独立はある程度であるが持ち得ることができたのである。しかし、文化的側面においてはどうであったのか。デンマークとの連合下におけるノルウェーの文化はエリートを中心にデンマーク的であった。次ではまず、スウェーデン人が持っていたノルウェー人に対する意識から見ていきたい。

2. スウェーデン人のノルウェー人に対する意識

1814年以後、スウェーデンとの連合がはじまったが、スウェーデン人はノルウェー人をどのように見ていたのだろうか。

アーノルド・パートンは“ *Sweden and vision of Norway*⁶⁸ ”の中でスウェーデン王妃、ヘドヴィグ・エリザベス・シャルロッタの1814年9月の日記を引用している。それによれば、ノルウェーには未だデンマーク政府の影が見え隠れしているとし、また人々には教育がなく、芸術も科学の知識も持ち合わせておらず、そして酒とタバコが好きで文明化されていないと書き記している。3ヵ月後の12月の日記には、豊かなノルウェー人は商人であり、ノルウェーは商人の民族であるとし、全てのノルウェー人は金持ちになるため商業と闘争に明け暮れており、芸術に対して無関心であると述べる。それに対しスウェーデンでは王家は啓蒙、美しい言葉、科学、芸術に興味を示し他の者へ模範となっていると著述している⁶⁹。

この記述からはスウェーデンの貴族、なかんずく王家の者たちが持っていたノルウェー人に対するイメージがうかがえる。当時スウェーデン人らは自分たちのことを「北方のフランス人」とみなし、近代的でコスモポリタンのであると評価し、その反面ノルウェー人のことは野蛮で洗練されていないと思っていたようである。

また、王家以外のスウェーデン人はどうであったのであろうか、クリスチャニアに派遣された公務員たちは自分たちが社会的に文化的に追放されたと感じていたという⁷⁰。

その反面、詩人J. A. ワッツマン（Wadman）は文明化されていないノルウェーの農民の中に啓蒙の兆しをみている。

「農民の心の中を、新たに与えられた自由という太陽が暖めている。デンマーク時代、より大きなニシンを捕まえることと沿岸に沿って密輸するということという美德以外を学ばなかった者たちが、今やである。」⁷¹と。

また、他のスウェーデン人もノルウェー人が野蛮で粗野であるにもかかわらず、勇気があり、正直で親切が彼らの特徴であると捉えていた。ヘドヴィグ・エリザベス・シャルロッテ王妃でさえノルウェーの下層階級のものが民族の最もよい部分であると考えていたようである⁷²。

このノルウェー農民層たちが、この連合下において1905年の独立に向けナショナル・アイデンティ

ティが生まれ、大きな力となっていくのである。

リンドグレンは、この連合下においてノルウェーの言語、習慣、宗教、文化はスウェーデンの影響による変化を経験しなかったと述べる⁷³。さらにアーノルド・パートンはノルウェーがスウェーデンに政治的、文化的に大きな影響を与えたとの立場をとっている⁷⁴。スウェーデンは憲法を持っていたが、王の権力は未だ大きく、王の権力に対する制限を盛り込んだノルウェーの体制は、スウェーデンの人々に新たな視点を持ち込んだのである。この記述からはノルウェーがスウェーデンとの連合下においてみずからのナショナル・アイデンティティを守ったとすることができるが、それは1814年の後のナショナリストたちの貢献によるのである。

3. ノルウェーにおける一般層の意識

次にノルウェーにおける人々の意識はどうであったのであろうか。

ノルウェーにおける文化、特に上流階級の人々の持つ文化はデンマーク的であった。これはデンマークとの連合時代、彼らの教育はデンマーク、コペンハーゲンで受けられており、また、公用文書はデンマーク語で書かれていたことに由来している。

ノルウェーを訪れたスウェーデンの教授スヴェン・ニールセンは1816年にこう書き記している。「クリスチアニアにおいて、人々はノルウェーの現実的な首都はコペンハーゲンであるとみなしている。」町並みに関しては、彼は人々の態度、言語から「ノルウェー的というよりもデンマーク的である」とみてとっている⁷⁵。またベルゲンはドイツの影響が強く、トロンハイムは英国的であったと彼は観察していた。これはそれぞれの貿易相手の影響である。トロンハイムにおいては著名な商人の家族は英語をよく話していたと書き記している⁷⁶。

その当時の人々は自分たちの実生活に関連している文化に強く影響を受けていたようである。

ノルウェーが自ら自覚をして独自の文化を再発見し、また新たに作り始めるのは、このスウェーデンとの連合下においてである。この19世紀初期から中頃にかけて、ノルウェー国内においてデンマーク的なるものからの脱却、スウェーデンとの連合からの脱却を願う声が現れ始める。ノルウェーとは何か、ノルウェー的なるものとは何かを思索し始めるのである。

その主なアクターは、政治家たちよりも文化人の力によるものが多く、彼らの多くは政治と密接に関係していった。現実の政治を動かしていくのは政治家であり、それはやはりエリートたちによる政治であったが、彼らにとっても、このナショナリストたちによる活動は無視できないものであろう。

. 1814年の影響

1. ナショナリストたちの貢献

このノルウェーにおける文化の側面におけるナショナル・アイデンティティの形成には民族ロマン主義の影響がみられる。

以下に主なナショナリストたちとその業績を簡単にではあるが列挙したい。

歴史家P.A.ムンク (Peter Andreas Munch) とルドルフ・ケイセル (Rudolf Keyser 1803-1864) は、ノルウェーにおける民族の独自性を強調した。ノルウェー歴史学校 (Norwegian historical school) は、彼らによりその名を知らしめた。

文学者H・ヴェルゲランド (Henrik Wergeland)、ヴェルハーベン (Johan Sebastian Welhaven) は、それぞれ二つの陣営を作り出し政治に影響を与えつつ論争を続けた。アンネリーセ・サイプはこれら二つの陣営の闘争は、反政府対政府、地方主義対中央主義、郊外文化対都市文化、愛国主義対ダノマニア (danomania⁷⁷)、自発に関する審美的口論対詩に対する形式的完璧主義であり、この両方は共にネイションを作り出そうとする戦いであったと分析する⁷⁸。

アスピョルン (P・C・Asbjørnsen 1812-1885) とJ・モー (Jørgen Moe 1813-1882) はノルウェー各地に口承されてきた民間伝承を一冊の本にまとめた。またJ・モーはM・B・ランドスタッド (M・B・Landstad) オーレア・クローゲル (Olea Crøger) と共に民謡を収集している。

音楽家グリーグ (Edvard Grieg 1843-1907)、オーレ・ブル (Ole Bull) は共に、その作曲の旋律に民謡の抑揚を取り入れた。

言語においては、イヴァール・オーセン (Ivar Aasen 1813-1896) がデンマーク語の影響のないノルウェー語を作り出そうとし、ノルウェー各地を回り、ランスモール (Landsmål) を作り上げた。この言語は1885年に公用語として認められ、デンマーク語から作られたリクスモール (Riksmål) と共に、現在のノルウェーにおいて、ランスモールはニーノルシュク (Nynorsk)、リクスモールはボクモール (Bokmål) とそれぞれ名前を変え今日まで存続している⁷⁹。

他にノルウェーにおける国民高等学校⁸⁰を創設したブルーン、エーケランド、ノルウェーの自然を描写した画家たち等の活躍が挙げられる。

彼らの多くはデンマーク、スウェーデン、また他の海外で教育を受けた知識層たちであったが、イヴァール・オーセンに代表されるように農民層出身者も存在する。また、注目すべきは、彼らの多くが1814年の記憶がまだ新しい世代であるということである。その彼らのなかからノルウェー独自の文化が創出、再発見され、また自己生産されはじめるのである。

アンネリーセ・サイプは1830年から1850年にかけてノルウェー・ナショナル・アイデンティティの要素が創出されたと述べる⁸¹。

また、ナショナリズムに対立するものとして、スカンディナヴィア主義があげられるが、これは第

2次スレースヴィ戦争により挫折されることとなる。

これらナショナリストたちの活動と同時に、ノルウェーは社会運動、政治運動が共に発展していった。劇作家イブセン（Henrik Ibsen 1828 - 1906）は、その「ペール・ギュント」といった作品にノルウェーに受け継がれてきた民話を題材にしている。また「人形の家」や「民衆の敵」等の作品からは、彼の社会、政治に対する意思表示がうかがえる。しかし、彼は村井誠人が述べているようにナショナリストというよりもスカンディナヴィア主義者である⁸²。

1870年代になるとスヴェルドロップを中心に農民層を支持基盤に取り込んだ左翼党が結成される。その左翼党は都市中産階級や労働者階級なども支持層に含め、その支持基盤は国民高等学校において教育された農村の若者であった⁸³。彼らは文学者ピョルンスチャーネ・ピョルンソン（Bjørnstjerne Bjørnson）を思想的支柱とした。この左翼党はノルウェー政府閣僚のスウェーデン議会への出席要求を行っている。また左翼党はスヴェルドロップの手腕により政権を得ることとなり、1884年には一定の年収をもつ男子全てに対する選挙権が与えられた。

2．国旗と憲法制定記念日における論争

連合下において二つの象徴に関する論争が存在した。それは国旗と憲法制定記念日（ナショナルデー）である。

その一つの論争である国旗に関しては、1821年に始まり、1879年にリベラル派による要求による終焉まで続いた。また、憲法制定記念日における論争は1824年に、学生が5月14日を祝ったことに対し、スウェーデン王が反発を示したことに始まる。スウェーデン側からしてみれば、祝うべき日は憲法を改定し、連合が始まった12月4日であったのである⁸⁴。

スウェーデンとの論争は、国旗と憲法制定日に関するものだけではなく、それは外務省、領事館、外交官に関する問題である。これは先述したが、憲法を制定する際、フレドリックが自ら外交政策を取る為に外交における政治機構を創設しなかったことにその発端がある。

その当時、与党であったリベラル党が1892年にノルウェー独自の領事館とその業務の創設を決定したが、スウェーデン王はこれを拒否、これを機に論争が盛り上がることとなる。

この論争はスウェーデンとの軍事的衝突の危機をもたらしたが、両者は交渉を続けた。しかし、スウェーデンとの関係の悪化からノルウェーはスウェーデンとの連合からの独立に、その解決を見出したのである。

これにより、ノルウェーはスウェーデンとの連合からの独立に対し国民投票を行った。この国民投票の結果は冒頭に述べたとおりである。

この結果からは、この当時には相当の国民意識が形成されていたと見てよい。これは、先述の1814年以降に芽生えたナショナリストたちの貢献による言語、民話・伝説の収集、文芸、芸術、教育を通しての改革の結果であった。

この国民投票の結果の後、ノルウェーとスウェーデンは交渉を重ね、ストールティングとスウェーデン議会において圧倒的な多数による賛成を持って、ノルウェーは連合から独立することとなったのである。

この1905年の国民投票による独立は、先のデンマークとの連合からの独立が政府官僚、経済人らによる「上から」の独立であったのに対して、国民全体からの声による「下から」の独立である。これは戦争がもたらした独立であった1814年に対し、約90年という年月をかけた自ら創りあげた独立であるといつてよいであろう。

. おわりに

現代、ノルウェーの議会であるストールティングを訪れると、1814年に関する記念展示をみることができ、議会の壁には憲法が制定された瞬間の模様を描いた絵画がかけられている。現在においてもノルウェーをつくりあげた112名のアイツヴォルに集った代表者は自国を見守っているのである。

ノルウェー以外の北欧諸国がEUに参加していく中、何故、ノルウェーのみがそれを拒み続けるのか。また1940年から45年の大戦時に何故ノルウェーの人々はレジスタンス運動を起こしたのであるのか。このノルウェーにおけるナショナル・アイデンティティは、いつどのように誕生し育まれてきたのであろうか。これが筆者のはじめの素朴な疑問であった。まず、その源泉を1905年のスウェーデンとの連合からの独立に求めた。しかしその当時のノルウェーにおけるナショナル・アイデンティティはすでに成熟していたと感じた。そこでさらに100年を遡ることとなってしまった。そこには新たな国を創ろうとする情熱と熱意にあふれた人々の姿があった。それはまだ数え切れるほどの少数であったが、これが後の国民投票のみられるようなノルウェーの大多数に支持されての独立の源泉となったのである。また研究を進めていくうちに1814年から1905年の間の100年間にいったい何が起きたのか。どのような経緯で人々は独立を願ったのか。という疑問が生じた。しかしそれは今後の研究の課題としていきたい。

脚注

¹ 本稿におけるナショナル・アイデンティティの定義はアントニー・D・スミスの文脈において用いる。

² Anne-Lise Seip, "Nation-building Within the Union: Politics, Class and Culture in the Norwegian Nation-State in the Nineteenth Century", *Scandinavian journal of history*, 20, op. cit., p.49.

³ Karen Larsen, *A History of Norway*, N.J., Princeton U.P., 1948., p.491.

⁴ Anne-Lise Seip, op. cit., p.36. 彼女はOdd Arvid Storsveenの著作"*Fornuftig kjerlighed t i l fædrelandet*."より引用

⁵ *Ibid.*, p.37.

⁶ Karen Larsen, op. cit. p.373.

-
- ⁷ Ibid., p.373.
- ⁸ Anne-Lise Seip, op. cit., p.37.
- ⁹ Karen Larsen, op. cit. pp.363-365.
- ¹⁰ Ibid., p.365.
- ¹¹ Gunnar Jahn, Alf Eriksen, Preben Munthe, *Norges Bank, gjennom 150 år*, Oslo,1966. p.5.
- ¹² のちに憲法制定会議における連合派のリーダー、Wedelがよい例である。
- ¹³ 1479年に創設
- ¹⁴ Midgaard, *A brief history of a Norway*,Oslo,1989. p.65.
- ¹⁵ Sivert, "The new nationalism and the new universities: The case of Norway in the early nineteenth century", *Scandinavian Journal of History* 20 (1995), pp.51-60. , p.53. シーヴェルトはこの日記の一文を通し、クラウス・パヴェルスが、ノルウェーにおける大学とネイションとの関係をエリートの感覚だけでなく一般の人々の感覚で捉えた先駆けとして考えることができると述べている。
- ¹⁶ Gunnar Jahn, Alf Eriksen, Preben Munthe, *Norges Bank, gjennom 150 år*, Oslo,1966. p.1.
- ¹⁷ Karen Larsen, op. cit., p.346.
- ¹⁸ Ibid., p.367.
- ¹⁹ Falnes, Oscar Julius, *National romanticism in Norway: Studies in history, economics, and public law*, New York, AMS Press, 1968., p.22.
- ²⁰ 1939年にオスロ大学と名前が変更される。今のオスロ大学の校舎は1841年に立てられた。現在ノルウェーには、オスロ、ベルゲン、トロンハイム、トロムソに大学がある。
- ²¹ Sivert, op. cit., p.53 生徒の数はIvar Libæk, Øivind Stenersen, *Norges Historie*には17名、『世界教育史体系 14』には教授16名、生徒20名から開始したとなっている。
- ²² ギリシア語の教授、後に哲学の教授となる。
- ²³ デンマーク王フレドリック の甥にあたり、ノルウェー王となるべく派遣されたが、半年間のみの統治に終わる。後にデンマーク王となる。
- ²⁴ Karen Larsen, op. cit., p.378
- ²⁵ Sivert, op. cit., p.53.
- ²⁶ Lindgren, Raymond E., *Norway-Sweden: union, disunion, and Scandinavian integration* /A Publication of the Center for Research on World Political Institutions, Princeton University, Princeton, N.J., Princeton University Press,1959.p.1.
- ²⁷ H. Arnold Barton, H. Arnold Barton, *Sweden and Visions of Norway: Politics and Culture, 1814-1905*, Southern Illinois Univ. Pr, 2002., p.14.
- ²⁸ リンドグレンはこの行動をスウェーデン国民への人気取りのためだと分析をしている。(Lindgren, op. cit., p.1.)
- ²⁹ 参照までにキール条約の最終頁のコピーを別紙添付。Ruud, Johan T, *Dette er Norge 1814-1964* / redaksjon Johan T. Ruud ... [et al.], Oslo, Gyldendal Norsk , 1963-1964. 3 v. のp.412より。
- ³⁰ Karen Larsen, op. cit., p.375.
- ³¹ Lindgren, op. cit., p.2.
- ³² Ibid., p.376.
- ³³ Ibid. p.10.
- ³⁴ Ibid.
- ³⁵ Karen Larsen, op. cit., p.376.
- ³⁶ カーシュテン・アンカーは憲法制定会議の会場を提供した。
- ³⁷ Ibid., p.377.
- ³⁸ Ibid.,p.377.
- ³⁹ ティングはヴァイキング時代の議会、集会。熊野聡『北欧初期社会の研究』未来社、1986年が詳しい。
- ⁴⁰ Karen Larsen, op. cit., p.377.
- ⁴¹ Ibid.,p.377.
- ⁴² Karen Larsen, op. cit., p.378.

⁴³ *Eidsvoll 1814 - Rikspolitisk senters nettsted* (アイツヴォル1814年 - 王国政治センターネットサイト) <http://eidsvoll1814.museum.no/index.html> 2003.12.24.現在にある当時会議に参加した者の階級別に分けられた名簿から作成。以下の一覧を参照。リンドグレンの著書には海軍と陸軍の人事部から32名、公務員から27名、役人57名。経済人16名、農民は37名とあるが、合計が112名にならず、また公務員と役人の違いがはっきりせず、聖職者という区分けがない。また他の歴史書もそれぞれ独自の区分けをしている。

・ *Eidsvoll 1814 - Rikspolitisk senters nettsted* (アイツヴォル1814年 - 王国政治センターネットサイト) の階級別名簿より

Bønder (農民) 36名

Omund Bjørnsen Birkeland
Ole Rasmussen Apeness
Peder Paulsen Balke
Sivert Paulsen Bratsberg
Nils Frederiksen Dyhren
Syvert Omundsen Eeg
Petter Johnsen Ertzgaard
Ole Olsen Evenstad
Lars Larsen Forsæth
Helmer Andersen Gjedeboe
Brynjel Andersen Gjerager
Anders Hansen Grønneberg
Paul Thorsen Harilstad
Hans Haslum
Peder Hjermand
Christopher Borgersen Hoen
Tallev Olsen Huvestad
Ole Svendsen Iglærød
Erich Haagensøn Jaabech
Peder Johnsen
Christian Christensen Kollerud
Even Thorkildsen Lande
Thor Reiersen Lilleholt
Niels Johannesen Loftesnæs
Theis Jacob Thorkildsen Lundegaard
Anders Lysgaard
Osmund Andersen Lømsland
Zacharias Mellebye
Asgaut Olsen Regelstad
Gullik Madsen Røed
Daniel Larsen Schevig
John Hansen Sørbrøden
Even Thorsen
Ole Knudsen Tvedten
Helge Ellingsen Waagaard
Elling Olsen Walbøe

Næringsdrivende (経済人) 18名

Jacob Aall
Jørgen Aall

Peder Anker
Diderik (von) Cappelen
Henrik Carstensen
Iver Hesselberg
Gabriel Lund
Severin Løvenskiold
Frederik Meltzer
John Moses
Christen Mølbach
Alexander Christian Møller
Ole Clausen Mørch
Jens Rolfsen
Peder Valentin Rosenkilde
Peter Schmidt
Carl Peter Stoltenberg
Johan Caspar Herman Wedel-Jarlsberg

Embedsmenn i offentlig administrasjon (政府役人) 26名

Johan Gunder Adler
Claus Bendeke
Gustav Peter Blom
Thomas Bryn
Wilhem Friman Koren Christie
Peter Jørgen Cloumann
Johan Collett
Carl Adolph Dahl
Christian Adolph Diriks
Jens Erichstrup
Christian Magnus Falsen
Andreas Michael Heiberg
Christian Hersleb Horneman
Lars Johannes Irgens
Andreas Aagaard Kiøn ig
Arnoldus von Westen Sylow Koren
Hilmar Meincke Krohg
Frederik Motzfeldt
Christopher Frimann Omsen
Anders Rambech
Andreas Rogert
Nicolai Schejtli
Poul Steenstrup
Georg Sverdrup
Lauritz Weidemann
Gregers Winther Wulfsberg

Millitære (軍人) 17名

Just Henrik Ely

Jens Schow Fabricius
Palle Rømer Fleischer
Diderich Hegermann
Frederik Hartvig Johan Heidmann
Ole Elias Holck
Envold Steenblock Høyum
Thomas Konow
Jacob Otto Lange
Peter Motzfeldt
Johan Daniel Frederik Petersen
Peter Blankenborg Prydz
Eilert Waldemar Preben Ramm
Henrik Frederik Arild Sibbern
Valentin Christian Wilhelm Sibbern
Frederik Wilhelm Bruenech Stabell
Georg Ulrich Wasmuth

Geistlige (聖職者) 15名

Johan Nordal Brun
Jacob Hersleb Darre
Hans Jacob Grøgaard
Hieronymus Heyerdahl
Peter Ulrik Magnus Hount
Georg Buchard Jersin
Hans Christian Ulrik Midelfart
Niels (Nicolai) Nielsen
Hans Hein Nysom
Lars (Lauritz, Laurentius) Andreas Oftedahl
Jonas Rein
Frederik Schmidt
Hans Jacob Stabel
Jens Stub

Nicolai Wergeland

⁴⁴ Lindgren, op. cit., p.10.

⁴⁵ *Eidsvoll 1814 - Rikspolitisk senters nettsted* (アイツヴォル1814年 - 王国政治センターネットサイト) <http://eidsvoll1814.museum.no/index.html> 2003.12.24. 以下の表は地域別の名簿から作成した。特に人口の多い都市、アーケスフスやベルゲン、トロンハイムにおいては2~4の区域に分けられているのが分かる。

憲法制定会議メンバー地域別人数

区域名	参加人数
Akershus Amt	3名
Akershusiske ridende Jægerkorps	1名
Akershusiske skarpskytterregiment	2名
Arendal	1名
Artillerikorpsset	2名
Bergen	4名
Søndre Bergenhus amt	3名
Nordre Bergenhus amt	3名
Bergenhusiske infanteriregiment	2名
Buskerud amt	3名

Bratsberg amt	3名
Kristiania	2名
Kristians amt	3名
Kristiansand	2名
Kristiansund	1名
Drammen	1名
Fredrikshald	1名
Fredrikstad	1名
Hedemarkens amt	3名
Holmestrand	1名
Jarlsberg grevskap	3名
Ingeniørbrigaden	1名
Kongsberg	1名
Kragerø	1名
Larvik	1名
Larvik grevskap	3名
Lister amt	3名
Mandals amt	3名
Molde	1名
Moss	1名
Nedenes	3名
Nordenfjeldske infanteriregiment	2名
Norske jægerkorps	2名
Opplandske infanteriregiment	2名
Porsgrund	1名
Robygdelagets amt	3名
Romsdals amt	3名
Røros bergkorps	1名
Smaalenenes amt	2名
Skien	1名
Stavanger	1名
Stavanger amt	3名
Sjødefensionen	4名
Søndenfjeldske infanteriregiment	2名
Søndenfjeldske dragonregiment	2名
Telemarkske infanteriregiment	2名
Trondhjem	2名
Søndre Trondhjems amt	3名
Nordre Trondhjems amt	3名
Første Thronhjemske infanteriregiment	2名
Andet Trondhjemske infanteriregiment	2名
Trondhjemske dragonkorps	2名
Tønsberg	1名
Vesterlenske infanteriregiment	2名
Østerrisør	1名
	計112名

⁴⁶ H. Arnold Barton, op. cit. p.16.

⁴⁷ Midgaard, op. cit., p.70.

⁴⁸ Johan Caspar Herman Wedel Jarlsberg カルマル連合時代からの独立志願

⁴⁹ H. Arnold Barton, op. cit., p.16.

⁵⁰ Ibid., p.15.

⁵¹ Anne-Lise Seip, "Nation-building Within the Union: Politics, Class and Culture in the Norwegian Nation-State in the Nineteenth Century", *Scandinavian journal of history*, 20, p.38.

⁵² Anne-Lise Seip, op. cit. p.35

⁵³ Ibid.,. クラウスの1814年12月31日の日記に関してはアイツヴォル記念館のウェブページに掲載されている。*Eidsvoll 1814 - Rikspolitisk senters nettsted* (アイツヴォル1814年 - 王国政治センターネットサイト) <http://eidsvoll1814.museum.no/index.html>

⁵⁴ Karen Larsen はJacob aall, *Erindringer som Bidrag til Norges Historie fra 1811-1815*, Christiania, 1859. (『1811 - 1815年のノルウェーの歴史への貢献としての記録』)の p.300から引用している。Jacob Aallは聖職者でもあったが工場主であり憲法制定会議には経済人として参加していた。

⁵⁵ Karen Larsen, op. cit., p.375.

⁵⁶ Ibid., p.375.

⁵⁷ Karen Larsen, op. cit., p.377.

⁵⁸ Lindgren, op. cit., pp.12-13.

⁵⁹ Midgaard, op. cit., p.74.

⁶⁰ Lindgren, op. cit., p.16.

⁶¹ Ibid., p.17.

⁶² 詳しくはAnne-Lise Seip, op.cit., p.39.

⁶³ Lindgren, op. cit., p.20.

⁶⁴ Bøndnerについては熊野聡『北の農民ヴァイキング 実力と友情の社会』平凡社、1983年が詳しい。Bøndnerを農民と訳していいのかわかる論争があるが、本論文は熊野聡に則した。

⁶⁵ Lindgren, op. cit., p.28.

⁶⁶ Lindgren, op. cit., p.26. しかしその閣僚の任命はストールティングのリーダーのアドバイスに従ったものであった。

⁶⁷ ストールティングはノルウェー国外での軍事力の行使権を所有していた。しかし、その機会は訪れなかった。

⁶⁸ H. Arnold Barton, *Sweden and Visions of Norway: Politics and Culture, 1814-1905*, Southern Illinois Univ. Pr, 2002.

⁶⁹ Ibid, p.88.

⁷⁰ H. Arnold Barton, op. cit., p.89.

⁷¹ Ibid., p.88.

⁷² Ibid., p.89.

⁷³ Lindgren, op. cit., p.26.

⁷⁴ H. Arnold Barton, op. cit. pp.178-179.

⁷⁵ Barton, p.87. パートンは Sven Nilsson, *Dagboksanteckningar under en resa från Södra Sverige till Nordland i Norge 1816*(Lund, 1879),55,67,130. (『南スウェーデンからノルウェーの北国への旅における日記』訳題) から引用している。

⁷⁶ H. Arnold Barton, op. cit., p.87.

⁷⁷ Einar Haugen, *Norwegian English Dictionary*, Wisconsin,1965.によるとdanoman: derog. danophile とある。デンマーク偏愛主義とでも訳すべきであろうか。

⁷⁸ Anne-Lise Seip, op. cit., p.40.

⁷⁹ Allan Karker, Birgitta Lindgren, Ståle Løland, *nordens språk*, 山下泰文、森信嘉、福井信子、吉田欣吾訳『北欧のことば』東海大学出版会、2001年、p.61.

⁸⁰ folkehøgskole, フォルクハイスクール、これは日本においては国民大学と訳される場合もある。この学校は高等教育を主としており、高等学校との訳より大学と訳する事の方が妥当であると思われるが、ここでは一般的に訳される事の多い、国民高等学校との名称を用いた。

⁸¹ Anne-Lise Seip, op. cit., p.43.

⁸² 村井誠人「ノルウェーの政治的スキャンディナヴィア主義の概観」『北欧史研究』、第1号、1982年、p.26.

⁸³ 百瀬宏、『北欧現代史』、山川出版、1980年、p.126.

⁸⁴ Anne-Lise Seip, op. cit., pp.40-41.